

〈書 評〉

過労死の研究

上畑鉄之丞著

27cm 190頁 3,000円

日本プランニングセンター 1993年

また日本発の新しい国際語が生まれた。その“Karo-shi”の先駆者である著者の「これまでの研究のまとめ」(著者まえがき)としての本である。

本書は、7章からなっており、そのいずれも、著者自身が体験した200数例の事例研究に基づいて整理された概念や知見を基に組み立てられている。

本書ではまず過労死の概念やその社会背景についての総論的なまとめを試みている。著者自身も言うように、過労死という用語については、さまざまな意見があるが、それを踏まえた上で整理をする。さらに過労死研究のもととなる社会的な背景や本人の加重労働、生活習慣、基礎疾患などとの関連を整理することにより、過労死発症にいたる仮説シェーマを提示している。

その概念を踏まえた上で、著者が経験した事例を基礎疾患や生活習慣、労働の状況などの視点から分析することにより、死亡原因と労働状況との関連を考察する。そこでは、さまざまな職種での日常的な労働の加重や不規則な生活習慣の状況が示され、職業別の疾病構造の特徴や、行動パターンと循環器疾患死亡や職業ストレスとの関連などを検討している。さらに本書では、以上のことを踏まえながら労災認定についての問題点やあり方や、社会医学としての公衆衛生の役割についても言及している。

労災の問題も多くの課題を抱えている。労災認定の判断に生活というものが、日常を暮らしている人の姿が反映されているだろうかということを、私は考えさせられた。本来、制度や「しくみ」というものは、その当事者の暮らしを守る、あるいは暮らしの安全を保証するためのものである。社会システムの「さが」でもあるのだが、「しくみ」や制度がシステムとして動き出し、それが一つの流れとして固定してくると、本来の目的を忘れて、そのシステムを守るために「しくみ」



が動き出してしまいう危険性をはらんでいる。つまり、「人は右、車は左」という交通ルールは、安全な交通のためのものであるはずのものが、いつのまにか「人は右を歩き、車は左を通る」というルールを守ることが目的のようになってしまう。制度や「しくみ」は、その時の状況や、時代の流れとともに、流動的に変化すべきものである。過労死と認定されるためには、死にそうになるほど疲れたときに休暇をとってはいけないという、妙な話にもなりそうな気配でさえある。

また、非常に興味深いのは、「保養セミナー」の試みである。健康保険組合連合会の主催で行われる「温泉利用型健康増進施設を活用した健康づくりモデル事業」として厚生省のモデル指定も受けて行われているセミナーについて、その効果が示されている。4泊5日の栄養、運動、休養を中心として、ライフスタイルの改善をめざしたセミナーでは、セミナー前後での検査値の変化や、1年後のライフスタイルの変化が検討されている。

まさに本書では、労働者の労働環境やライフスタイルの問題点や労災の考え方、休養のあり方など幅広い視野でまとめられている。労働衛生を労働環境の問題や労働負荷の視点からだけでなく、労働者自身のライフスタイルや行動パターンの視点も含めて検討していることは、非常に重要なことである。

その意味では、本書は、労働衛生の分野だけでなく、まさしく地域保健への問題提起でもある。成人保健の対象の多くは労働者であり、職場の健康管理も非常に重要な問題であるが、生活の拠点は地域である。普段の食事、休暇の過ごし方、家族というものについての価値観など、労働者自身の生活パターンは、何らかの

形で家族に影響を与え、また、家族の影響を受ける。そのようにして、家族の生活パターンができるということは、そこに育つ子供達は、まさしく過労死予備軍になっていく。住民の生活パターン、労働パターン、休暇のパターンは、そこに住み、生活する人達の価値観や考え方の影響を受ける。過労死予備軍の暮らす地域では、それを労働環境の問題としてだけではなく、地域全体の暮らしの姿として捉えて、対応する必要があるだろう。

地域保健の立場からいえば、労働者の健康を考える場合、個々の労働者の地域での暮らし方を視野にいれておかなければ、職域での的確な健康管理は不可能ということもいえるだろう。人はさまざまな立場で、地域とのつながり無しでは生活できない。休日に、家で過ごす。その家での過ごし方は、前述のように、地域の影響を受ける。つまり、職場で休暇がとれたとしても、それを自分の生活を中心としてどう活用できるかということは、地域保健の分野と一緒に考えて行かなければ、解決できないことであろう。

地域保健では、その地域に暮らす人達の生活習慣や食習慣に対しては、いろいろな方法、手段を使って対応しようとする。その対象となる、婦人や老人とともに、労働者層の生活パターンに想いを馳せ、その改善のための地域での役割を考えることが必要であろう。その意味で、本書が、地域保健に提起するものを、労働衛生の関係者だけでなく、地域での保健活動を進める人たちも受けとめて欲しいと思う。

本書で紹介される保養セミナーは、その内容を見るだけでも、疲れがとれたような気がした。ここで、重要なことは、このような休養が、日常のなかで、自分が必要と思ったときに、気軽にとれるだろうかということである。そのためには、労働者自身や家族の意識、経営者や管理者の意識、そのような設備、費用、指導者数などさまざまな乗り越えなければならない課題があるだろう。今回は、モデル事業ということであるが、モデルの普遍化を望みたいところである。

岩永俊博（疫学部）